



Title	神を請う楽の音 : 福建省泉州提線木偶戯における技法の象徴性とその継承
Author(s)	山本, 宏子
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/43136">https://hdl.handle.net/11094/43136</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	山本宏子
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第16682号
学位授与年月日	平成14年3月12日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	神を請う楽の音 —福建省泉州提線木偶戯における技法の象徴性とその継承—
論文審査委員	(主査) 教授 山口 修  (副査) 教授 根岸 一美 教授 天野 文雄

### 論文内容の要旨

本論文は、中国福建省の「泉州提線木偶戯(糸操り人形劇)」を対象にして、音楽学を中心に隣接諸学にもまたがって総合的な研究をおこなった成果である。とりわけ、木偶戯が本来おこなわれていた儀礼的な脈絡を考察の出発点とし、時代とともに近代的な意味での「演劇」化・「芸術」化が進むにつれて変化した状況を歴史的に探るために、楽器編成の変化に着目し、あわせて楽器がもつ象徴性と社会的機能の異同の有無を解明する。

序「研究の目的と方法」では、対象と目的をこのように規定したうえで、フィールドワークの手法が肝要であることが主張され、1995年から2000年までの6年間に定点観察的に繰り返し訪れた全12回におよぶ調査について、また参与観察と記録作成の方法について概略的に論じられる。本論は2部構成、通し番号による全12章からなり、結「神を請う楽の音」で締めくくられる。

第1部「泉州提線木偶戯の時空間」は基礎的なモノグラフを提示することを目的とし、第1章「泉州提線木偶戯の上演機会の変遷」、第2章「泉州提線木偶戯の現在」、第3章「地域社会における木偶戯の受容」、第4章「泉州の人々と『目連救母』」、第5章「木偶戯を取り囲むシステム」、第6章「木偶遣いの伝承方法」、第7章「脈絡変換の時空間」という筋道を立てて、これまで曖昧にしか知られていなかった地方的民間伝承とその変化を論じている。これにつづく本論文の主要部分としての第2部「泉州提線木偶戯の楽器が織りなす音文化」は、第8章「泉州提線木偶戯の楽器学」、第9章「楽器と奏者」、第10章「大噯と噯仔の異同」、第11章「『請神・辞神』と楽器編成」、第12章「『目連救母』と楽器編成」、第13章「楽の音が象徴する世界」という論の流れに沿って単なるモノグラフを超えた文化象徴論が展開される。

結論として、循環呼吸法で持続的に発音される大噯という気鳴楽器が「神の降臨」を象徴する儀礼的な意味合いをもっていたこと、舞台芸術的に変化した後ではそれを模倣することによって「神の木偶の登場」を象徴する機能を持つようになったことを指摘する。さらに、『請神・辞神』という儀礼的演目の言葉・所作・音楽は、どのような脈絡変換があろうとも同一性を保つ強い力を内包し、泉州社会の人びとがいだく世界観を表わし続けていることも指摘する。

(分量 本文222頁400字詰原稿用紙換算約666枚 付録等55頁 演目資料、参考文献、日英長短要旨)

## 論文審査の結果の要旨

民間に伝承され時代の流れにより変貌を遂げつつある表演芸術についての理解は、それぞれの土地の人びとのあいだで口伝情報として蓄えられているものや、部分的には書伝のかたちで残されている情報に頼ることによって、可能となる。したがって、フィールドワーカーはそれらの情報を記録整理し、適切な解釈を施して歴史を再構成する必要がある。本研究は、日本および他のアジア諸国のそうした事例に豊富に接してきた論者の経験に裏づけられており、この種の研究のモデルとなっている。しかも、現代の状況に重点をおいて参与観察するフィールドワークにも従事した結果、文化人類学や民族音楽学の領域で重視されるようになってきている象徴論にまで及んでおり、それが歴史研究との重ね合わせで達成されているところに本論文の特徴がある。また、楽器の記述が丁寧になされているので、資料的価値が高い。

ただし、本論文には短所もいくつか認められる。たとえば、フィールドワークで収集された情報の出所が必ずしも明確に記されているとはいえない。しかしこれは、当地で論者が築いた人間関係をくずさないようにするという意図があって、故意に表現をやや曖昧にせざるを得なかったという事情によるものであると思われる。また、音楽学の内部にとどまるのではなく、隣接する諸学への橋渡しを心掛けたのはよいとしても、それが徹底的になされたとはいえない。

しかしながら、これらの短所は本論文に続く研究において補うことが可能であり、学界に対する貢献度の高い本研究の価値を損なうものではない。本論文は、民間伝承の現代的な研究として従来の水準を超える優れた論考である。よって本研究科委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに十分な価値を有するものと認定する。